

# 阿岐のまほろば

Vol. 32

## 尾根上の集落跡と沖積地の集落跡と

みぞぐち たかのちやうみぞぐち  
溝口2号遺跡(高屋町溝口)



写真1 溝口2号遺跡空中写真



写真2 B区近景(北から)

溝口2号遺跡は高屋町溝口に所在し、一般国道375号(東広島道路)道路改良事業に伴って、平成16年5月から12月まで発掘調査を実施しました。調査は、A・B2つの調査区に分けて行い、弥生時代の<sup>たてあなじゆうきょ</sup>竪穴住居跡や<sup>ほったてはしらたてもり</sup>掘立柱建物跡、溝状遺構などを検出しました。

A区は、遺跡南側の<sup>しらとりやま</sup>白鳥山から北流する溝口川が運んだ土砂によって形成された<sup>ちゅうせきち</sup>沖積地に立地します。沖積地の場合、遺跡が残りにくいのですが、溝口2号遺跡は好条件が重なったのか、低い島状の部分で遺構が見つかりました。A区で見つかった<sup>たてあな</sup>竪穴住居跡は、柱穴や炉跡がありませんでしたので、作業小屋などの簡易な建物と考えられます。

また、「L」字状に曲がった溝で区画された内側の柱穴は、掘立柱建物跡の一部かも知れません。

写真3・4は、A区で見つかった動物の足跡遺構です。写真3は、遺構面を精査している時に見つかった状態の写真で、灰色の土が詰まっています。この灰色の土を掘っていくと写真4のようになり、直径約10cm、深さ2~3cmの窪みがたくさんできました。よく観察すると、「U」字状や「」字状になっています。イノシシやウシなどの<sup>ぐうていりい</sup>偶蹄類の足跡と考えられます。

調査区東側の尾根(写真1中央の林部分)の頂部に住居などがあり、一段低いA区の周辺などで

動物を使った農作業が行われていたのでしょうか。あるいは、調査区内に水が湧き出してくる落ち込みがあり、その周辺でも足跡が多数見つかりますので、足跡遺構は水飲み場に集まってきた動物がつけていったものとも考えられます。

ウシを使って耕した田畑をイノシシが荒らす…。こんな繰り返しが行われていたのでしょうか。

残念ながらこれら動物の足跡は、遺物を伴わないため、はっきりとした時代はわかりませんでした。ただし、足跡とその上層の灰色土には、弥生～中世の土器が混じっていたので、足跡は中世に埋まった可能性があります。

一方B区は、A区よりやや北側に位置し、南から北へ延びている細長い尾根とその西側斜面にあたり、尾根の頂部で竪穴住居跡や土坑などが見つかりました。また、斜面には溝が2条めぐることから、集落を区画していたのかもしれません。写真2は、B区を北側から見たもので、中央部分に竪穴住居跡があり、尾根に並行して（写真では上下方向の）細長い溝があります。竪穴住居跡や溝の中から弥生土器がたくさん見つかりましたので、B区は弥生時代の集落とわかりました。

弥生時代の集落と溝というキーワードから真っ先に頭に浮かぶのは、「環濠集落<sup>かんごうしゅうらく</sup>」でしょうか。しかし、溝口2号遺跡で見つかった溝は深さが



遺跡位置図(国土地理院発行 1:25,000 地形図「白市」)



写真3 A区足跡遺構検出状況



写真4 A区足跡遺構を掘り下げたところ

20cm前後と浅く、溝の底も平らになっているので、防御が主な目的である「環濠」というよりも集落の「区画」や「排水施設」としての溝と考えられます。

また、写真2のように、調査区の一部に黒色の土が広がっていました。その黒色土の上層と下層で遺構が見つかりましたので、B区の集落は、少なくとも2時期に分けられるようです。なお、下層で見つかった土坑は小型の壺<sup>つぼ</sup>を伴っており、弥生時代のお墓の可能性もあります。近くでは黒曜石<sup>こくようせき</sup>の鏃<sup>やじり</sup>も出土しました。

このように溝口2号遺跡は、尾根上の集落だけでなく、痕跡が残りにくい沖積地にも当時の人々の生活した様子が刻まれていることを明らかにしました。

## 飯田の土居屋敷跡を調査

じょうぶつど い やしき あと はちはんまついいだ  
城仏土居屋敷跡(八本松飯田)



城仏土居屋敷跡は、西条盆地の西端、深堂山(標高597.8m)の南側裾部に位置する遺跡です。都市計画道路飯田線の改良工事のため、平成15年11月から平成16年3月まで発掘調査を実施しました。

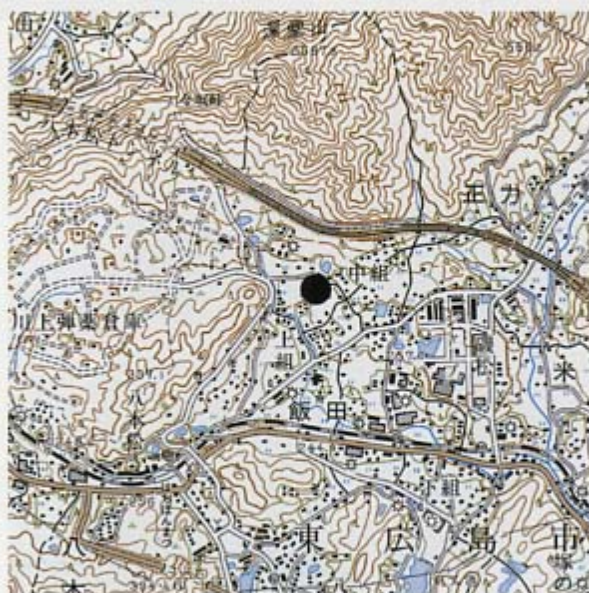
調査は屋敷跡の南端部を対象にして行い、上下2つの遺構面を確認しました。

下面の遺構は、東西幅約40mの屋敷の中にあり、掘立柱建物跡を含む多数の柱穴、土坑、溝、杭列などが見つかりました。また、屋敷の周囲を堀が巡り、土橋もあったことがわかりました。

屋敷跡の東側にある3間×2間の掘立柱建物跡は、柱と柱の間隔が広いことから馬小屋と考えられます。また、南端のほぼ中央部にある1間×1間の掘立柱建物跡は柱穴に根石をもっており堅牢な建物と考えられ、屋敷の入り口に位置し、土橋に連なっていることから門の跡ではないかと思われます。この入り口の東側にあたる堀の底か

らは、木橋の部材と考えられる木材が多数出土し、複数の出入り口があったことがわかりました。

その後、盛土をして東西幅約80mと大きく屋敷を拡張しています。



遺跡位置図(国土地理院発行 1:25,000 地形図「安芸西条」)



掘立柱建物跡

上面の遺構は、盛土の上にあり、掘立柱建物跡を含む多数の柱穴、土坑、溝、鍛冶炉と思われる遺構、段状遺構、石列などが見つかりました。遺構のなかには、鉄製品を加工した鍛冶炉<sup>かわや</sup>や厠<sup>おおいや</sup>とその覆屋の可能性が考えられるものがありました。建物跡は小規模なものでした。屋敷の周囲には、下面と同様に堀が巡っており、堀の内側には土塁や石垣が巡っていました。土塁を復元すると、堀の底からの高さは3 m近くになり、柵列の跡も多数見つかりました。敵の侵入から防御することに力を入れていた様子が良くわかります。

遺物は、坏や鍋を中心とした土師質土器、備前焼などの国産陶器、青磁などの輸入磁器、漆器、下駄・羽子板・木簡などの木製品、砥石、鉄釘、古銭など、様々なものが出土しました。これらは、



出土遺物



木橋

当時の生活の様子を良くうかがわせています。

下面の屋敷は、出土遺物から15世紀後半頃まで使用されていたと思われます。その後、敷地が拡張されて上面の屋敷は、15世紀後半頃から16世紀頃のものとして推定できます。この時代は、中央では応仁の乱などの戦乱があり、室町時代から戦国時代へと時代が変化している頃で、この地域もその影響を受けて屋敷の防衛機能を強化する必要があったと考えられます。屋敷の住人としては、当時、この地域は大内氏が支配していたことから、その家臣として周辺を統治していた地元の国人(武士)を想定することができます。

また、天文20(1551)年に毛利元就が頭崎城<sup>かしらぎじょう</sup>の攻撃を終えた後、西条飯田村の「城仏」というところの土居屋敷を攻めて休息の場所にしたという言い伝えがあり、その場所は、この屋敷であった可能性が考えられますが、今回の調査では確証となるものは発見できませんでした。

(財) 東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

### 阿 岐 の ま ほ ろ ば Vol. 32

発行日 2005(平成17)年3月25日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター  
発行 東広島市西条町馬木541-1  
TEL 082-425-3880 〒739-0033

印刷 今谷印刷株式会社  
東広島市西条町寺家6608番地